

杉戸町今昔往来伝

古きをたずねて
杉戸を再発見

第101回

郷土の偉人・大島有隣
— 石門心学 入門③ —

中沢道二は、享保十年（一七二五）八月十五日、京都西陣で代々機織を生業とする家に生まれました。道二というのは、心学の門に入ってからで、名を義道、通称を亀屋久兵衛と呼んだようです。兄弟子にあたる布施松翁という人物を介して、手島堵庵の門に入りました。その年月は詳らかではありませんが、明和の末・安永の初めの頃（一七七〇年代頃）であったと考えられています。初老を過ぎてからの入門ということになります。程なくして道二は、堵庵の代講を務めるまでになり、あちこちへ出向くようになりました。安永七年（一七七八）、商用で江戸に出た道二は、望まざるままに「心学道話」を試みたところ、名声を博したといえます。翌年、堵庵の命を受けた道二は、齢五十五にして江戸に下向し、本格的に関東への心学普及の一步を踏み出しました。

源蔵方に、天明三年（一七八三）一説には天明元年とも）に仮設され、寛政元年（一七八九）に神田小川町の旗本近藤氏の邸へと移転、そして寛政三年十月には、神田相生町に、堂々百二十畳敷の大道場として新築されたのでした。ここに、名実ともに関東心学の大本山たるに相応しい「参前舎」の完成をみたのでした。奇しくも、大島有隣、関口保宣の二人が中沢道二の門に入ったのは、参前舎が誕生したといわれる天明三年。つまり、参前舎が江戸に産声をあげたとほぼ同時に、有隣や保宣が、石門心学の道を歩み始めたということになります。その二年後には恭儉舎が大島村に設けられ、更にその翌天明六年には、道二自身が大島村に来訪、恭儉舎にて心学道話を一週間講じています。これらのことを鑑みますと、入門当初から有隣、保宣の二人に、道二が目をかけていたことがわかります。（つづく）



中沢道二

（社会教育課 町史・文化財担当編）

みんなでつくる 愛される図書館①

問合せ

町立図書館 ☎ (33) 4056

最近、読書をしていますか？

読書は子どもから大人まで年齢に関係なく、日常の暮らしの中では得られないような、多様な知識や知恵を得ることができます。

例えば、千年以上前の哲学者や、世界的な冒険家、実業家たちの生き方や考え方を読書を通して知ること、行き詰ったときに発想を柔軟にしたり、苦しいときに勇気をもることが出来ます。これはテレビやゲーム、ネット動画などの経験とは全く異なります。

そんな本が町立図書館には約16万冊、所蔵されており無料で読むことができます。

広くて明るい空間で座り心地の良いソファ、たくさんの学習机、Wi-Fiも開館当初から備えており、こんな素敵な場所を利用しないのはもったいない！

来月から複数回に渡って図書館の魅力、活用の仕方をご紹介しますので、ご期待ください！



UD FONT
by MORISAWA

ユニバーサルデザイン(UDフォント)を使用し、読みやすい書体を採用しました。



杉戸町
ホームページ



メール配信
すぎめー



広報スマホ版
マチイロ



杉戸町
公式LINE